

コントロールと連鎖について*

遠藤 喜雄

要旨

本稿では、コントロール構文を見ながら、次の2点を考察する：(i)コントロール構文の派生には移動が関与しているか、(ii)連鎖は派生と表示のどちらを用いて定義されることが妥当であるか。

キーワード：コントロール，連鎖，表示，派生

0. 序

本稿では、コントロールの構文を考察対象とし、次の2点を議論する。

- 1) コントロール構文には、移動が関与するか否か。
- 2) 連鎖は派生により定義されるか、表示により定義されるか。

本稿は、以下のように、構成されている。まず第1章では、本稿の基礎をなす連鎖に関する基本的な背景を概観する。次に第2章では、コントロール構文を見ながらその問題点を探る。さらに第3節では、連鎖が派生を用いて定義される独立した証拠を見る。最後に第4章では、全体の議論をまとめる。

1. 背景

まず、Rizzi (2004)による連鎖(chain)の表示を用いた定義を見よう。

- (1) $(A_i \cdots A_n)$ is a chain iff, for $1 \leq i < n$
 - i. $A_i = A_{i+1}$. (Identity)
 - ii. A_i c-commands A_{i+1} . (Prominence)
 - iii. A_{i+1} is in Minimal Configuration with A_i . (Locality)

この定義によると、連鎖は、次の条件が満たされる場合に形成される：(i) 2つの同一(identical) 要素があり、(ii)一方が他方よりも構造的に優位であり(prominence)、(iii) 2つの要素が最小の構造の中にある(locality)。この場合、最小の構造とは以下のように定義される。

- (2) Y is in a Minimal Configuration with X iff there is no Z such that
- i. Z is of the same structural type as X, and
 - ii. Z intervenes X and Y.

ここでは、2つの要素間の間に、2つの同一要素の間にそれと同じタイプの要素が介在(intervene)しない場合、それら2つの要素は最小の構造にあることが述べられている。ここで介在とは次のように定義される。

- (3) Z intervenes between X and Y iff Z c-command Y and Z does not c-command X.

ここでは、2つの要素のうち、一方が他方を構成素統御(c-command)し、後者が前者を構成素統御しないことが示されている。

この場合、AがBを構成素統御するのは、AがBと姉妹の関係にあり、BがCを支配(dominate)する場合である。さらに、同じタイプとは、以下に見るように、指定部(specifier)と主要部(head)を意味し、指定部は項(argument:A)と非項(non-argument: A')を意味する。

- (4) “Same structural type” = (i) head or Spec, in the latter class, (ii) A or A'.

より正確には、指定部の関係は、以下の4つのクラスに分類される。

- (5) i. Argumental: person, number, gender, case
ii. Quantificational: Wh, Neg, measure, focus
iii. Modifier: evaluative. Epistemic, Neg, frequentative, celerative, measure,

manner, etc.

iv: Topic

要するに、2つの要素の間に介在する要素とは、2つの要素の間に別の同じクラスの要素が挟まっている場合である。

次に連鎖の派生的な定義として、Starke (2001)を見よう。

(6) a. A chain is legally formed to the extent that a moving element of a feature type in does not skip another element of the same feature type.

b. X Z Y

I) +A ….. +A ….. <+A> * (identity)

II) +A,+B ….. +A ….. <+A,+B> OK (inclusion)

III) +A ….. +B ….. <+A> OK (disjunction)

この定義によると、2つの要素間の間に連鎖が形成されるのは、移動が生じる場合、同じタイプの要素を飛び越さない場合である。ここで、移動が可能となるのは、移動する方の要素が移動される要素よりも豊かな素性を持つ場合である。

この派生を用いた連鎖の定義が有効である事例として、関係節の習得を挙げることが出来る。Friedmann, Belletti & Rizzi (2009)によれば、子供の言語習得の初期の段階では、主語を関係節の先行詞とすることは可能であるが、目的語を関係節の主要部にすることは不可能である時期がある。これは、名詞句(NP)というタイプの目的語が関係節の主要部として同じ名詞句というタイプの主語を飛び越して移動が生じると、合法的な連鎖が形成されないためである。

(大人の文法では、移動する要素は名詞句という素性に加え関係詞の素性(R)をもつため、連鎖の形成が可能となる)

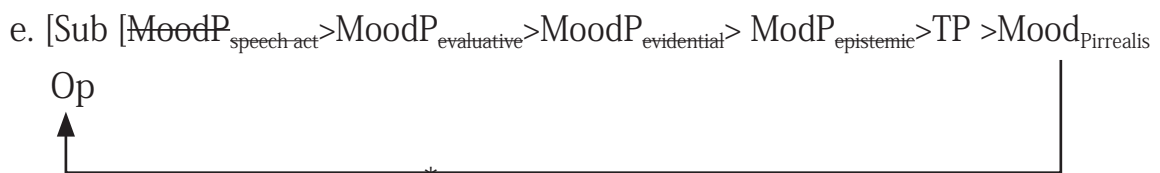
(7) Headed object relative crossing over a lexically restricted subject:

Show me the elephant that the lion is wetting <the elephant>

+R, +NP	+NP	+R, +NP
X	Z	Y

さらに、Haegeman (2010) に派生を用いた連鎖の形成を支持する事例が挙げられている。Haegemanによれば、条件節においては、ムードタイプ属する可能世界の演算子(world operator)が、Cinque(1999)の非現実のムードの階層から移動する。そして、その場合、同じムード副詞を飛び越すと合法的な連鎖が形成されないとした。つまり、そのような場合、条件節の内部には以下に見るムードタイプの副詞が生じないのである。

- (8) a??*If frankly he's unable to cope, we'll have to replace him. (Speech act)
 b* If they luckily /fortunately arrived on time, we will be saved. (Evaluative)
 c. *If George probably comes, the party will be a disaster. (Epistemic)
 d. *If the students apparently can't follow the discussion in the third chapter, we'll do the second chapter. (Evidential)



2. コントロール構文

次に、第1節の背景を念頭において、コントロール構文を考察しよう。コントロール構文に関しては、目的語の名詞句が移動することにより派生されるという分析が、Boeckx, Hornstein, and Nunes (2010)により提示されている。<>でくくられた要素は、移動間の位置を示している。

(9) John persuaded Mary [<Mary> to leave].




本稿では、この派生の妥当性を関係節の派生と関係させながら論じる。Rizzi and Shlonsky (2006)によれば、関係節において節が主語を必要とするというEPPの要件は、形態素により満たすことが可能としている。例えば、フランス語では、形態素*i*がEPPを満たしている。

- (10) a. L' homme **que** tu vu
the man that you saw
'the man that you saw'
b. L' homme **qui** est venu
the man that has come
'the man that has come'

本稿では、コントロール構文において、テンスに関連するtoが名詞性を持ち、それがEPPを満たすと提案する。その結果、補文の主語名詞句が補文内部で凍結することなく、主文の目的語の位置に移動が可能となる。(テンスを持つtoについては Martin (2001) and Stowell (1981)を参照のこと。)

- (11) John persuaded Mary [Fin to [TP (subject position) [vP <Mary> to leave]



本稿の主張は、日本語のコントロール構文により支持される。日本語のコントロール構文においては、toは「よう」という要素が対応する。そして、この「よう」という要素が名詞性を持つことは、「に」という格助詞が生じる事実により支持される。というのも、格助詞は通例、名詞的な要素の局所的な領域に生じて格を付与するからである。

- (12) ジョンはメアリーを[はやく出かける*よう]説得した。

ここで、「よう」が英語のtoに対応することは、この種のコントロール構文に

において、補文の時制の要素が常に「ル形」で「タ形」を持たないというFujii (2006)の一般化により支持される。つまり、英語の不定詞と同様に、テンスの情報が乏しいのである。

(13) Fujii (2006) の一般化

Tensed subordinate clauses in Japanese are [-finite] if and only if their predicate does not alternate between the present tense and past tense form.

では、以上の点をふまえて、コントロール構文の移動分析を見よう。本稿で重要なのは、コントロール構文において移動分析を採用すると、補文の名詞句が名詞性を持つtoを飛び越して移動するという点である。(以下で、先に述べた例を採録する)

(14) John persuaded Mary [Fin to [TP (subject position) [vP <Mary> to leave]



ここで名詞的要素が名詞的な要素を飛び越すと、(15)に見るように合法的な連鎖の表示(representation)が生じない。

(15) …Mary…to…<Mary>…

[+N] [+N] [+N]

しかし、以下に見るように、連鎖が派生的に形成されると、toが後の段階で挿入される(late insertion)と合法的な連鎖は形成される。

(16) derivational step 1: …Mary…<Mary>…

[+N] [+N]

derivational step 2: …Mary…to… <Mary>…

[+N] [N] [+N]

ここから、連鎖の派生的な定義が経験的に支持される。†

3. コントロールと派生：敬語化

以下では、連鎖の派生的な定義を敬語の現象を見ながら考察する。まず、コントロール構文で、名詞句が移動する位置はどのような位置であるかを考察しよう。この位置はAgroPの指定部であると思われる。この点を日本語の敬語を見ながら考察しよう。敬語のルールは、直接目的語や間接目的語と動詞の接頭辞「お」が一致する規則である。(ちなみに動詞の接頭辞「お」は、漢語動詞にのみ可能である) Boeckx and Niinuma (2004) は敬語のルール適用が間接目的語によって阻止されることを観察している。

- (17) a. ジョンは田中先生をお助けした。
b. ジョンは田中先生にメアリーをご紹介した。
c. *ジョンがメアリーに田中先生をご紹介した。
d. ジョンが田中先生にメアリーをご紹介した。

この敬語のルール適用はコントロール構文には可能であるが、ECM 構文には不可能である。

- (18) a. ジョンが田中先生をパーティーに出席なさるようご説得した。
b. *ジョンが田中先生をすばらしくお思いした。

ここで、コントロール構文の派生が文法素性 (ϕ feature) が引き金になると考えよう。Miyagawa (2010)によれば、日本語においては、談話に関わる素性が文法素性に対応し、移動の引き金となる。この考えによれば、敬語のルールは談話素性により引き起こされる。つまり、以下に見るように、名詞タイプが介在すると、合法的な連鎖が形成されない。(ここでは、Jiong (2007) や Pylkänen 2002: にしたがって「に」格に上と下のタイプがあり、移動の阻止を引き起こすのは上の「に」格と考える。)

(19) …[AGRoP DP-Acc…[AplicativeP DP-Dat…<DP-Dat>…<DP-Acc>…
/-----*chain-----/

Boeckx and Niinuma (2004: FN 4)によれば、間接目的語が受動化の規則により取り除かれると、敬語化が可能となる。(この点については、Okura (2010)を参照のこと)

(20) *メアリーが (ジョンによって) <メアリー>田中先生をご紹介された。

これは、間に同じタイプの阻止要素が取り除かれた結果であると考えることが出来る。

(21) …AGRoP…ApplicativeP…IO…DO…
/-----chain-----/

ここで重要なのは、表示を用いた連鎖の定義によれば、常に間接目的語が直接目的語の敬語のルール適用を阻止するという点である。なぜなら、Rizzi and Shlosnkyが示すように、連鎖の一部は局所性の違反を引き起こさないからである。

/-----/

(22) [TP IO …AGRoP…ApplicativeP…[vP … <IO>…DO…
/-----chain-----/

ここから、再び連鎖形成が派生により定義されることが妥当であることが支持される。

4. 結語

以上、本稿では、連鎖の派生と表示を用いた定義を考察し、コントロール構文を見ながら、連鎖の形成が派生を用いて定義されることが妥当であることを見た。そして、この考えを敬語化の現象を見ながら支持した。

References

- Boeckx, C., N. Hornstein and J. Nunes. 2010. Control as movement Cambridge: Cambridge University Press.
- Boeckx and Niinuma. 2004. Conditions on Agreement in Japanese" *Natural Language & Linguistic Theory* 22, 453-480.
- Belletti, A. & L. Rizzi (2009) "Moving verbal chunks" , in press in Brugè L., A. Cardinaletti, G.Giusti, N.Munaro, C.Poletto, eds., *Functional Heads, Oxford University Press*.
- Cinque, G. 1999. Adverbs and functional heads. Oxford-New York: Oxford University Press.
- Collins, C. (2005) "A Smuggling Approach to the Passive in English" , *Syntax*, 8.2, 81-120
- Endo, Y. 2006. The cartography of Japanese syntactic structures. Ph. D. dissertation, University of Geneva.
- Endo, Y. 2007. Locality and information structure. Amsterdam/Philadelphia, John Benjamins.
- Endo, Y. 2009. A Cartographic Approach to Head Movement: A case study of adverbial Clauses. Paper presented at *MASL*. Budapest, Hungary.
- Endo, Y. 2010. A syntactic view of head movement: A cartographic approach to adverbial clauses. Paper presented at *GLOW in Asia VIII*. Beijing, China and at GIST 2. To appear from John Benjamins.
- Friedman, A., A. Belletti, and L. Rizzi. 2009. Relativized relatives. *Lingua* 119: 67-88.
- Fujii, T. 2006. Some theoretical issues in Japanese control. Ph.D. dissertation, University of Maryland.
- Haegeman, L. 2010. The movement derivation of conditional clauses. *Linguistic Inquiry* 41, 595-621.
- Jeong, Y. 2007. Applicatives: Structure and interpretation from a minimalist perspective. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Martin, Roger. 2001. Null Case and the Distribution of PRO. *Linguistic Inquiry* 32(1), 141-166.
- Okura, N. 2010. Okura, N. 2010. Passivization in ditransitives and honorifics. Paper presented at Interface of Minimalism and Cartography, Tohoku University.

- Rizzi, L. 1997. The fine structure of the left periphery. in L. Haegeman (ed.) *Elements of grammar*, Kluwer Publications, Dordrecht.
- Rizzi, L. 1990. *Relativized minimality*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Rizzi, L. 2004. Locality and left periphery, in A. Belletti, ed., *Structures and beyond The Cartography of syntactic structures*, Vol 3, Oxford-New York: Oxford University Press.
- Rizzi, L. and U. Shlonsky 2007. Strategies of subject extraction. In Gärtner, H-M. and Sauerland, U. (eds.), *Interfaces + Recursion = Language?* pp: 115-160. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Starke, M. 2001. *Move dissolves into merge*. Ph. D. dissertation. University of Geneva.
- Stowell, T. (1982). The Tense of Infinitives. *Linguistic Inquiry* 13: 561-570.

*本稿に対して、Norbert Hornstein, Jairo Nunes氏から有益なコメントをいただいた。感謝の意を表したい。尚、本稿の研究は、日本学術振興会科学研究費助成金（基盤研究(B) (#21320079)研究代表者、遠藤喜雄)「談話のカードグラフィー研究：主文現象と複文現象の統合を目指して」の補助を得てなされている。

¹ 本稿では詳細に論じないが、英語では、補文にbe allowed toが生じると、コントローラーが変化する。例えば、(i)の文において、コントローラーは主語のJohnであるが、補文にbe allowed toが生じる(ii)の文では、コントローラーは目的語のMaryである。

(i) John promised Mary to leave.

(ii) John promised Mary to be allowed to leave.

日本語で、be allowed toに対応する表現は、可能の「え」という表現であると思われる。例えば、以下の(iii)では、コントローラーは主語の太郎であるが、「え」を補文に含む(iv)の文では、コントローラーは目的語の花子に変化している。

(iii) 太郎は花子に出て行くことを約束した。

(iv) 太郎は花子に出て行けることを約束した。